

探究とは。

「学問図鑑」監修と「探究学習」から感じたこと

宮野公樹

なぜ我々大人は、子どもの関心を伸ばそうとするよりも、自分の（自分たちの）都合をつい優先してしまうのだろう。そして、ついそれを育児や教育だと思ってしまうのだろう。

何年も前のことだろうか覚えてだが、落合陽一氏のSNSでの投稿を見ていたら、「息子には何もかも勝手にさせる」と書かれていた。例えば、ブロックで遊んでいたら、それを妨げることは一切しない。むしろ、本物の建築家を招いてその子と遊ばせる、とのこと。その後、どうなっているのだろうか。

そう、幼少期育児の経験のある人間なら一度は頭に浮かんだであろう、もし、何もかもを子どもの好き勝手にさせ

たらどう育つのだろうか、という考え。これは、幼児期のブロック遊びだけでなく、小中学校時に子どもの興味関心事を思う存分やらせることも含む。我々大人はつい、子どものためと考え、早く寝なさい、野菜を食べなさい、宿題をしなさい、などと言う。いったいこれらは何を言っていることになるのだろうか。「子どものため」とはいつたいたんのことだろうか。

本誌特集「〈子ども〉を考える」について考えるのであれば、諸問題にかかる制度論、方法論もさることながら、このような地点からまず考えたいものである。そもそも、教育とは何か、子どもに対して教育するとは、何をしていることになっているのか。

何を言うか。好き勝手にして野生児のようになって、社会が成り立たないではないか。皆が規範やルールを守ってこそ、安心して暮らすことができるのだ。

なるほどそれはその通り。では、人は（あなたは）社会の維持の為に生きているということですか。そういう「社会」とはいったいなんですか。そして、それは自分が持つて生まれた何かを手放すことになってしまいませんか。子どもの、ひいては人間特有の本来の能力についてどう考えますか。

かつてプラトンが苦悩したように、誰とてこれに答えるのは難しいだろう。だがこれは、問い続けるに値する問いのようにも感じる。

私は、落合氏ほどの力も覚悟もなかったが、自分の手の届く範囲でこの問いを営みに変えようとしてきたその一つが、ある図鑑の監修という挑戦であった。

学問図鑑の監修

ふと突然、Gakkenの担当者から連絡があった。新たに学問の図鑑を創刊するから、その監修をお願いしたいと言う。私は学問論の研究をしており、その研究成果の一つで

ある様々な学術分野の文化特性を比較した調査結果を一般向けに公開したサイト「ナビスコラ」を見つけ、連絡をくれたらしい。

監修という仕事は私にとって初めてであり、これはよき挑戦を与えてくれたと思い、ぜひ詳しく話を聞きたいと返答。特に、〈子どもたちが学生時代というキャリアを充実させるために、どんな「学び（学問）」に取り組みたいかを自分の「好き」から見つけてもらう〉、というコンセプトが素晴らしいと思った。

すぐに対面で打ち合わせとなったが、その図鑑の具体的な構成を見てびっくり。先のナビスコラを用いて、自分に合う学術分野を見つけるフローチャートがあったり、学術分野の地図を掲載するなどの工夫はあったりするものの、図鑑のメインは、第一章「数学」に続き、物理学、生物学、地学、化学、工学、情報学……と、ただ順々と分野紹介が続くのみ。さらには、出版費用の関係でまずは自然科学編から発刊し、次は人文社会科学編に挑む予定だが、それは自然科学編の売れ行き次第だという。

これは、ありえない……直感でそう思った。この図鑑は、学問の細分化を助長してしまう。

周知のように、やれ理系だ文系だと何かと二分しているのは我が国だけであり、英語圏では「理系」、「文系」に該

当する表記は存在しない。確かに、明治維新以降、国力増強のため人材育成と技術力向上を二大柱として推進し、その結果、高度経済成長期を迎えたわけであるが、もはやそれも昔のこと。人口オーナス期においては、この二分は負の側面のほうが大きい⁽²⁾。

加えて、近年では「学際」や「総合知」がキーワードであり、学術分野が過度な細分化となっている現状に警鐘を鳴らし、いつそう複雑化する社会的課題解決にむけて、学術分野間で連携や融合、協同せよと内閣府、文科省等中央官庁が必死に旗を振っている⁽³⁾。

時代や社会状況に逆行していることもさることながら、学術分野の羅列がメインの図鑑では、「子どもの取り組みたいことを自分の「好き」から見つけてもらう」に反している。それに、まだ無垢な興味関心を持つ子どもの時期に、学術分野を固定的に伝えるのは、むしろ害とも言える。学術分野は、人間の興味関心、または社会的必要から生じたものであり、その逆はない。先に分野が存在しているのではなく、人間が自ずと生んだものであり、歴史的経緯を含みつつ、今後も流動的なのだ。このような専門観は、残念ながら現在の研究者もあまり持ち得ておらず、学術分野は二次元平面の区画ではなく、文字通り「門」なのだと伝えてもピンとこないかもしれない⁽⁴⁾。いや、だからこそ、

子どもの時期から本来の専門観で接することがとても大事のように思えたのだ。

例えば、自然でも社会でも歴史でもいい、何かのカテゴリの中で様々な興味関心の対象を多数羅列するのはどうか、と話した。それを目次代わりにし、その先を辿ったら学術分野の紹介があるという構成はどうか、と。

担当者らはさぞ困ったことだろう（申し訳ない）。社長決済までおりた出版企画案を真正面から覆され、その打ち合わせは終わった。

そうして、本件の記憶が薄れてきた約二ヶ月後、なんと、先の出版企画書を白紙に戻し、全く新しいものを作り直してこられた。彼女たちの柔軟な感性とパワーはすごいし、それを受け入れた会社もすごいと思った。内容もさらに充実している。これは引き受けないわけにはいかないということ、図鑑づくりに至った。

しかし私は、監修の仕事を舐めていた。図鑑の内容の構成案や、ライターの方が書いた文章案がどしどし送られてきて、直ちに確認してくれという。もしかしたら、修正提案のアドバイスに留めていたらよかったのかもしれないが、やはり言葉を仕事にしている以上、手を抜くことはできない。相当な部分を手入れ、または自ら作文してなんとか完成させ、出版に至ったのは最初の企画書を見てから約

一年後の二〇二三年二月だった。

少しだけ紹介すると、この図鑑では⑤、「身の回りの気になること」として、自然、社会、スポーツ・芸術、レジャー・エンタメ、社会課題の五つの大項目に分け、それぞれにおいて、例えば、

「地球には何種類の生き物がいるの？」

「ネットの買い物でお金はどやうやって支払われているの？」

「人が人を好きになるってどういふこと？」

など、合計二〇八個もの「気になること」が記載され、それぞれについて三〇〇文字程度の解説と関連する学術分野が記載されている。

こだわったのは、二つ。一つは、学術分野の説明はあえて問いかけの形式で記載し、その後、自らで調べようとするきっかけにすること。もう一つは、学術分野の紹介において、複数分野を併記すること。例えば、「生命とは？」という問いに関しては、科学的・生物学的な説明にとどまらず、脳死に関連させて法学や哲学の話もとりあげている。そもそも、私たちの内に生まれる探究心や問いというも

のは、特定の学術分野や、いわゆる理系や文系という区分けに当てはめることができないものである、より本質的であるほどに。加えて、いかなる興味関心や問いも、あらゆる事柄と関係しており、特定の学術分野に収まりきるわけがないのだ、より誠実に問いに向き合うほどに。この図鑑では、このような「本来の問いの在りよう」を具現したのであった。

ありがたいことに、「こんな図鑑はこれまでになかった」と、記事になったり、インタビュアーを受けたり。また、この図鑑を題材にしたワークショップも開催した。出版元であるGaggleの協力のもと、図鑑内にある興味関心のマップをポスターサイズに拡大印刷し、そこから子どもたちが気になる問いを選んで、それを発表し合うというもの。大学院生と若手研究者らがファシリテーターとなって、子どもたちの「気になる」を思う存分掘り下げていた⑥。その後さらに、図鑑のキャラクターが科学技術振興機構主催サイエンスアゴラ2023のキービジュアルに採用されるなど、話題に事欠かなかった。

今日的な探究学習

注目を集めたのはありがたいことだが、本当は少し複雑でもある。この図鑑の構成、つまり、「自分の気になる」

を学びの原点におくのは、あまりに当たり前のことだからである。その当たり前が当たり前ではないために世間に珍しがられた、その事実が少し残念なのだ。

「自分の気になる」が学びの原点、と書いた流れで想起されるのが「探究学習」である。探究学習は、二〇二二年頃から高校で必修化、小中学校でも総合的な学習の時間に取り入れられている。しかし、せっかくの「探究」学習であるのに、本来の探究が脇に置かれている傾きがある。

文科省によると、探究学習とは、生徒自ら問いを立て、情報の収集や分析を行い、時に学外の大人や組織と議論や協働をし、何か結論（答え）を探す学びとのこと。確かにそれは全くとってよきことのように感じる。しかし、果たして探究とは何か。

何か対象を定めてそれについて調べ、まとめることは「調査」である。図書館で書物や図鑑を開き、あるいはインターネットで検索すれば大抵のことは知れるし、実験や観察という手法を導入したり、教師がティーチャーではなくファシリテーターとして関与したりすれば、調べ方や議論の仕方、発表の仕方といった一連の研究の「やり方」をそれなりに学ぶことには効果的なことであろう。が、それに留まるのなら「調査型学習」と定義したほうが良い。実際、学

校の現場でも「調べ学習」という言葉が存在する。

また、SDGsを掲げ環境問題の解決を図ったり、シャッター街となった商店街の復興を狙ったり、地元の暮らしに役立つスマホアプリ開発をしたりするような課題解決型のテーマもまた探究学習の一つとされているが、これは文字通り課題や問題の「解決」であって探究ではない。

もちろん、一連の課題解決プロセスを実行するには独自の創発や積極的な実践行動（アクティブ・ラーニング）が必要であり非常に学習効果は高いだろう。が、それなら「課題解決型学習」と定義したほうが良い。

調査型学習であろうが、課題解決型学習であろうが、いずれも大きな意味があり確実な学習効果が得られることは間違いなく、一方的な既存知識の伝達型授業よりよっぽど良い。だが、探究型学習は「探究」という言葉を使っている以上、私は「探究」であってほしいと思う。

ここで少し検索してみると、本当の探究型学習においては概念（コンセプト）を考えることが大事、と書いてある。例えば、ある文学作品の人物描写について研究するなら、それについてより多角的に理解できたということに留まるのではなく、そもそも文学とは何かといったような議論の抽象度を上げることが大事、とのこと。

なるほど確かにその点において調査型や課題解決型とは

違う。私はこれに同意はするものの、決定的なもの足りなさも感じる。概念化することは「探究」とはやはり違う。個別課題についてその概念まで考えるところというのは、抽象度が上がっただけ、議論を概念化させただけであり、「探り究める」のとは違う。

本来の探究

では、探究とは何か。それは探究という言葉の字面の通り、「探り究めよう」とするその営みのことである。調査でもなく、解決でもなく、「究める」なのだ。

一般的に、「究める」と言えば、(特に学術分野においては)何か特定の対象について徹底的に知りつくすことで、得られる知識はどんどん詳しくなっていくものだと思われる。だが、これは「物知り」になっただけであり、やはり「究める」とは違う。探究の本質ではない。

おそらく探究とは、知識が詳しくなっていくというよりむしろ、問いが問いを呼び、その問いがどんどん連なって根源に迫っていく営み。そして、その果てとしてたどり着く根源とは、己はなぜ存在するのかといった自分の生き死にや自己の在りように繋がる境地^③。結局、切り口としての「対象」から始まり、そして、「自己」に戻るのだ。こういう領域の問いに達して、あるいはその領域を一度は

通過したことが匂ってくるような思惟をもって、はじめて「探究」と呼ぶのではないかと考える。

何を言う。それを中高生に求めるのか。ましてや、それを指導する教師はどうしたらいいのだ。

と思うかもしれない。しかしそう考えることこそが、本来の探究を見失っている現在の探究型学習の重大な欠陥ではないか。

本来の探究。その領域で思考することは長年にわたって研究しなければならぬことでもなければ、知恵熱が出るくらい考えつめなければいけないことでもない。存在への不思議は誰もが所有しているはずで、探究とは何か、ひいては、教育とは何か、社会とは何か。これらを問うことなく、ただ現実の社会への対処や対応を考えてきた、その思考が濁っているだけである。

「宇宙は誰が作ったの?」

「心ってどこにあるの?」

「運命ってなんなの?」

見よ。まだ社会なるものの目線を持たない子どもの探求

こそ（これらの問いは先の図鑑から持ってきた）。この本質的な問いは、社会なるものの「ものさし」を疑おうともしない我々大人の精神を一瞬で貫く。探究心を育てたいなら、我々大人が邪魔をしないことに限る。指導などもつてのほか。むしろ大人が子どもから学んだほうがいい。学習プログラムで探究を育もうとは、「計画的イノベーション創出」というフレーズに近い語彙矛盾である。自らそれを潰しておいて、それが大事だから育むのだなど、こっけい極まらない。

育人

生の意味、根源的な問いこそ探究であり、そのような問いを突き詰めて生徒の探究結果発表ポスターに記載せよ、と言いたいのではない。先に述べたように、いかなる切り口であろうが、すなわち、探究学習のテーマに何を対象にしようが、生徒と教師、生徒と生徒のよき言葉づかいの対話を以てして、「探究」に触れることはできる、と言いたいのである。自分は変わる用意がある。そういう者たちの対話によって推進される探究学習は、「やらされ探究」と揶揄されるものとは大きく異なり、必ずや生徒ならびに教師の血肉となろう⁽⁹⁾。

つまるところ、探究学習で獲得したいものは、しなけれ

ばならないのは、パフォーマンス評価と呼ばれる知識や技術を実際に活用するための項目内容ではなく、探究という精神、知への構えである。これは根幹に位置するゆえ、探究学習だろうが受験勉強だろうが、人生のあらゆるところで発揮される。そして、よき人間となり、社会なるものを構成していく。

これが私なりの教育の目的に対する考えでもある。本論の冒頭、教育とは何かと書いたが、その本質は、おそらく教えて育てる教育ではなく、人を育てる「育人」（いくじんと呼ぶ）ではなからうか。むろん、教育とは人格の完成をめざすことであるから、これは当たり前のことを言っているに過ぎない。しかし、「教育」という言葉が邪魔をし、つい教えること重視してしまっていないか。これに気づくためにも、育人という言葉を私は使用する。そうすることで、探究の本当の意味を、目的を、忘れないようにできる。

* 本書は、筆者自身のWEB記事「誰も教えてくれない「学び」とは何か」、学び直しブームへの「大きな違和感」「現代ビジネス」(二〇二三年三月)の内容を一部含みます。

註

- (1) 自分の特性に合わせた学問分野診断や、さまざまな領域が絡み合う学問分野相関図を掲示した「ナビスコラ」は、京都大学学際融合教育研究推進センターのウェブサイトにリンクがある。https://www.cpler.kyoto-u.ac.jp/
- (2) 参考として、隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書、二〇一八年）、横山広美『なぜ理系に女性が少ないのか』（幻冬舎新書、二〇二二年）他、日本経済新聞「「理系か文系か」やめませんか 革新阻む前世紀の遺物」二〇二四年二月一九日記事。
- (3) ただし、筆者はこれに対して少し批判的である。参考：宮野公樹「学問との再契約（連載企画第一回：超えるのではなく迎える、二つの文化）」、『アステイオン』九五号、二〇二一年。
- (4) 宮野公樹「専門とは何か」京都大学アカデミックデイ 2023 講演資料、アカデミックデイ賞受賞。
- (5) 宮野公樹編『世界が広がる学問図鑑——「気になる」は君の個性だ—』Gakken、二〇二三年。
- (6) https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000005338.000002535.html
- (7) https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000005126.000002535.html
- (8) 宮野公樹『問いの立て方』ちくま新書、二〇二一年。
- (9) 具体的に、どのように探究の対話をやればいいのか、ということに関して、筆者は、日経S&Pのアドバイザーを務め、年間二〇校の高校生チームに探究活動の支援を行っている。その経験から、何か言えることはあるかもしれないが、それはまたどこかで。

（みやの なおき・学問論／大学論）